

# エコミュージアム須坂市の地元力

まちがまるごとミュージアムの概念は、エコミュージアムとも呼ばれ、地域資源を地元民が守っていこうとする概念でもある。

東京オリンピックの後、なおコロナ蔓延の中、所用で軽井沢に行った折、須坂市の博物館と美術館による企画展示のチラシを手にした。また訪ねたことがなく、展示が魅力的であり入出の少ない時期でもあったので、この機会を見逃さないと思いきろクルマで足を延ばした。

目的は2つ。1つは須坂市笠鉾会館ドリームホールで開催中の「須坂藩察吉向焼」の展示。もう1つは須坂版画美術館での「天折の銅版画家 清原啓子」幻想の展示である。

1790年代に遡る須坂祇園会は、江戸時代の養蚕など経済の活況に裏打ちされて生まれた。疫病退治が本来の行事であったが、コロナ禍の今年は、いつもより規模を縮小し実施されたという（昨年中止だった）。

## 須坂藩

### 14代の陶宝

須坂市は、城下町の街並みで落ち着く。笠鉾会館は、須坂祇園会の祭礼に各町の曳き出される笠鉾や屋台の展示館。一階のフロアに、11基の笠鉾と4基の屋台が展示さ

## 地元力発見!

佐藤建吉 「洗楓座」代表

22

寺地震で窯が崩壊し、事業も終焉した。しかし、藩窯として与えられた「紅翠軒」で行阿により仕

上げられたものは秀作ばかり。吉向焼と称される。今回の展示品は、緑や白や金の色彩の壺や籠や鉢は、いずれも小器ではあるが、大宝の品格を備えるものだった。

## 町の人々が

### 〈学芸員〉に

同じ須坂市に、自然景観豊かな広大な地に博物館3館と古民家の4館が隣接する須坂アートパークがある。版画美術館で特別展示中の清原啓子展は、版画36点と原画8点で、精緻なエッチングや鉛筆技法の作品である。筆者は、そのチラシに盛り込まれた「天折の銅版画家」と「幻想」の2文字、背ピックの版画画像に魅了されて、今回訪問した。

清原啓子（1955～1987年）は、31歳で早世しており、展覧大会に出品参加したという。その出品作「マラソン」「スキー」

実は、第5回ストックホルム大会（1912年）から第14回ロンドン大会（1948年）には「芸術オリンピック」という競技があり、朝治も1936年のベルリン大会に出品参加したという。

須坂市は、「蔵のまち」といわれるように街並みが歴史的情景を呈している。

地元の人々が、日々の暮らしのあり様、その価値や特徴を、観光客に、博物館や美術館の〈学芸員〉として伝えてくれる「エコミュージアム」の活動が望ましい。地元で出会った中高校生らしい若者は、まさにそうした振る舞いを演じてくれた。こうして、須坂では持続性ある地元力を発見した。

1950年山形生まれ。東京都立大院卒。元千葉大学大学院工学研究科准教授（金属疲労専攻）。金属疲労の研究のほか、他分野のテーマの研究開発に努めるとともに日本各地の地域おこし活動に従事する。ローカル鉄道と地元の酒蔵のコラボで地域再生を図る地酒「鐵の道の製造販売を企画、すでに10件を超える銘柄を送り出している。一般社団法人「洗楓座」代表。「全国ふるさと大使連絡会議」理事



上) 笠鉾会館の展示品／笠鉾と屋台  
下) 坂版画美術館／清原啓子の展示会場



順路